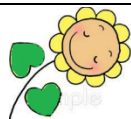


檮だより

2020. 6. 29. Mon.



「Hello darling! ～マーガリートに教わったこと～」

ちょうど 25 年前、K 高校に転勤した時のことです。初日にいきなり、オーストラリア語学研修の引率教員を募集していると知らされました。希望者が誰もいなくて困っているというのです。私は迷わず手をあげました。3 週間もオーストラリアに行ける?! それまで私は 2, 3 日の旅行以外、海外に出たことはありませんでしたから、転勤早々こんな機会があるなんて、なんていい学校に来たんだろうと小躍りしました。

初めてのオーストラリアで、私がどれだけの人々と出会い、どれだけのことを学んだか、それはとてもこの紙面で語り尽くすことはできません。ホストマザーのマーガリートとその家族、留学コーディネーターのルウとミシェル、二人の上司のジョン、マーガリートの友人や近隣の人々、その思い出は 25 年を経ても少しも色褪せることはありません。

私が行った場所は、シドニーから車で時間半ほど南に下ったところにある、ボマダリーという小さな町です。生徒達はそこでホームステイをしながら、午前中はボマダリー高校に通って英語の勉強をし、午後は地域の自然や文化施設を訪問し、様々な体験をしました。



Bomaderry High School

私のホストマザー、マーガリート・テイラーは、出会ったとき 86 歳でした。芝生に囲まれたこぢんまりとした一軒家に一人で住んでいました。かなりの肥満体型で、持って行った浴衣は前が合わなかったけれど、小顔で白髪交じりのプラチナブロンドの髪がほどよくカールしている、とてもチャーミングな女性でした。すこぶる元気で掃除も料理も何でもこなし、買い物は自分で車を運転してスーパーまで出かけて行きました。

ある日の夕食時のことです。私は、テーブルの上にコーヒーを数滴こぼしてしまったので、マーガリートに「ティッシュはどこ？」と尋ねました。マーガリートは不思議そうな顔をして、「そのクロゼットの戸を開けたら中にある」と教えてくれました。クロゼットの大きな扉を開けてティッシュを 1, 2 枚、箱から引き出してテーブルの上の水滴を拭いた私に、マーガリートはこう言いました。

「和子、私は食事の度にあなたにナプキンを用意してあげてるんだけど、どうしてそのナプキンを使わないの? ナプキンは汚れてもまた洗えば使えるけれど、ティッシュは使ったら捨てなくてはならないから、二度と使えないのよ。」



その瞬間、私は恥ずかしさで顔が熱くなりました。と同時に、自分がいかに使い捨て文化に毒されているかを思い知りました。マーガリートの言うナプキンとは、少し古くなった小さいハンカチで、彼女は確かに食事の度に、そのハンカチナプキンをきちんと折りたたんでナイフの横に置いてくれていたのです。私は、無意識のうちに、ナプキンを洗う手間のほうを惜しんで、ティッシュペーパーを使う方がいいと思い込んでいたのです。しかし、マーガリートから見れば、ティッシュペーパーの本来の用途はテーブルの上の水滴を拭くことではなく、そのために使うのは無駄遣い以外の何ものでもないのです。



ナプキンだけではありません。私がコーヒーをテーブルの上に直に置くと、マーガリートは、テーブルが傷むから必ずコースターの上に置くようにと注意しました。

86歳のマーガリートは年金生活でした。その額は驚くほど少ないもので、福祉の充実と、本人の儉約とでなんとか生活していけるのでした。それなのに知らぬ外国人のホームステイをボランティアで引き受けてくれたのです。生活費を比べれば、マーガリートは決して裕福とは言えなかったけれど、日々の生活ぶりは、私の日本の生活よりも遥かに豊かでした。テーブルの上にはナプキンとコースター、そして庭に咲いているジャスミンの花。お客が来ればテーブルクロスを広げます。そのテーブルを囲んで、コーヒーを飲みながら、友人と何時間も話すのです。その経験は、豊かさに関する私の観念にコペルニクスの転回をもたらしました。そしてそれは、その後の私の生き方に関わる大切な教えになったのです。



Jasmine の花

私はマーガリートと一緒に買い物や外食、様々なところに出かけました。マーガリートは、よく行く店でも、初めて行く店でも入店する時には間違いなく「Hello darling!」と言いました。マーガリートだけではありません。観察すると、他の人々も、店に入るときに気軽に「Hello」と言うことが多いのに気がつきました。日本ではどうでしょう。たとえば初めて立ち寄ったコンビニエンスストアに入るとき、「こんにちは」と言う人がどれくらいいるのでしょうか。

多文化共生の社会では、言葉できちんと思いを伝えなければ相手には通じません。挨拶もしない無表情な人間が店に入ってきたら、強盗でもするのではないかと警戒されて当然なのです。そもそも、挨拶は、「私はあなたの敵ではない」ということを示すものでした。日本人の挨拶はお辞儀ですが、仏教とともに中国から入ってきたというこのお辞儀も、相手に頭を下げ首を見せることによって、敵意がないことを示すものだったそうです。そう考えると、挨拶はもともと知らない人にこそすべきものだといえるのではないのでしょうか。

しかし、今、身の回りを見ると、知らない人に挨拶しないどころか、知っている人にも挨拶をしない人が増えているようで、とても残念なことだと思います。

私は、広島なぎさの生徒達に、心を開いて誰にでも挨拶できる人になってほしいと心から願います。マーガリートのように、どんな人も「Darling (愛しい人)」と思って、「Hello」と言える人になってほしい。そうすれば必ず豊かに生きることができると思うのです。

